

魂と記憶をめぐる政治

A Politics over Soul and Memory

石 井 潔

Kiyoshi ISHII

（平成8年10月7日受理）

Abstract

Since the latter half of the 19th century, people in Europe have suddenly begun to talk about their personal memories with unprecedented eagerness. Recovering the past events and behavior in memory has become the only way to make sure their 'personal identities'. Because they have lost their belief in the soul and the afterlife with the secularization of society and the decline of religious consciousness.

But our personal memories are not the exact representation of what actually happened. We give new meanings to our life through reinterpreting the past. And how to interpret human actions in the past depends on political situation. For example, once human rights of woman and child come to be respected, certain behavior which was formerly seen as innocent could be reinterpreted as 'sexual harassment' or 'child abuse'.

So there has always been a political tension between those psychologists such as Janet or Freud who encourage people to become a new person through redescribing the past experience in memory and the conservative who try to defend common sense about the past and discredit recovered memory therapy. This is also the case with literary studies where the integrity of literary 'works' seems to be threatened by theoretical intervention in literary 'texts' from various political positions such as feminism or postcolonialism. But cultural politics of this kind is an inevitable consequence of the thorough secularization in our time.

1. 「魂」から「記憶」へ

自分自身が犯罪を犯したことを知らない犯罪者が、探偵として犯人を追ううちに犯人が自分であることを発見する。客観的な証拠は明らかに彼が犯人であることを示しているにもかかわらず、彼自身にはそんなことをした「記憶」がまったくない。1868年にコリンズが書いた推理小説『月長石』は、このような奇妙なプロットをもっている。さらにこの小説は、そのすべてが事件の関係者によって「書き留められた」手記、日記、手紙等によって構成されており、物語の時間の上でもページ数の上でも、読者と登場人物の双方が小説の最初の方で起こったでき

ごとを「忘れる」ほどの計算された「長さ」をそなえている。そして「忘却」をまぬがれる「書きことば」のなかに残されたそのような過去のできごとを「思い出す」ことが、まさに事件を解くカギとなるという手の込んだ作りになっている（コリンズ 1970）。

人間の「記憶」の危うさと、にもかかわらずそのような「記憶」に依存せざるをえない人格的同一性の脆弱さを見事に描き出しているこの小説が19世紀の後半に登場したのは、決して偶然ではない。18世紀の初頭に、ロックが、実体的に実在する「魂」によってではなく、知覚と「記憶」の持続性によって我々の人格を定義しようとした時にはじめて、identityという用語は、現在一般的に用いられている意味を獲得した。「私」とは「ばらの匂い」に他ならないというコンディアックの美しい言葉は、ロック的な意味での人格の本質をよく表している（プーレ 1969: 22）。またさらにさかのぼれば、すでにモンテーニュは、「記憶」の持続という意味での「私」は恒常的なものではなく「無限の多様性をもつ顔」にすぎないことを明らかにしている（プーレ 1969: 52）。「魂」から「記憶」への人格像の転換には、このような前史がある。しかし大衆的な意識のレベルで、実体的な「魂」への信仰が動揺するに至ったのは、産業化と都市化の進行と普通選挙の実施による大衆の政治参加に伴って伝統的な宗教的権力が弱体化し、政治、教育、文化などの様々な側面での「世俗化（secularization）」が現実のものとなった19世紀後半のことであった。

このうち知的な側面での「世俗化」を象徴するできごとが、1859年のダーウィンによる『種の起源』の出版であったことは、よく知られている。すでに地動説との対峙のなかで、聖書の記述を文字通りの事実とする解釈は後退していたが、人間は神の似姿ではなく猿の進化した形態にすぎないとする進化論の衝撃は、人間の自己理解に関わるだけに深刻であった。またさらにダーウィンの主張は、「思考は脳から、ちょうど胆汁が肝臓からあるいは腎臓から尿が分泌されるのと同じ様に分泌される」という言葉で有名な地質学者のフォークトや、科学の名の下に宗教を攻撃した本として当時最もポピュラーであった『力と物質』の著者で医学を専門とするビュヒナーらの、自然科学的な事実のみを根拠とする素朴な唯物論者たちによっても「利用」され、無神論的唯物論というより通俗化された形で欧米各国に広く普及した（Chadwick 1975: Chap. 7）。『月長石』や『ジキル博士とハイド氏』などのいわば「魂」を失い、薬によってその人格さえをも変えてしまう主人公たちの物語の背景には、このような思想状況があったのである。

伝統的にカトリック教会の政治的思想的影響力が強かったフランスにおいては、普仏戦争敗北直後の1870年に成立した第三共和制の下で、王権派＝教会と共和派＝反教権主義との政治的対立を背景として、文字通り人格の本質は「魂」であるのか「記憶」であるのかをめぐる激しい論争が繰り広げられた。「魂」や「神」は独立した実体として存在し、それは我々の内省によって直接的に把握されんとする当時代表的な哲学者であったクーザンの主張は、共和派にとっては、カトリック的な信仰の露骨な弁護論であった。権力を獲得した共和派のイデオログであり、コント的な実証主義の信奉者であったテーヌは、このようなスピリチュアリズムを厳しく退けた。彼は感覚や記憶の複合体というロック的な人格概念を前面に押し出し、それらから切り離された実体としての「私」の存在を否定した。そして彼にとって、自らの主張を実証する有力な実例となったのが、ちょうどその頃、アザムによって報告されたフェリーダという「二重意識（double conscience）」すなわち多重人格の女性であった。彼女の意識は、通常の状態と「二次的状态（condition seconde）」の間でしばしば切り替わり、例えば二次的状态に

あった時に妊娠したことを通常の状態の彼女は否定するというように、相互に他の状態にある時の「記憶」を全く欠いていた。このような多重人格者の存在は、まさに超越的な「魂」や実体的な「自我」を否定し、人格が「記憶」によってのみ定義されうる非実体的なものであるにすぎないことを証明しているとテーヌは考えたのである。こうしてフェリーダという一人の控え目な女性が「共和主義者たちの兵器庫」という役割を果たすことになった (Hacking 1995: Chap. 11)。

2. 「政治」と心の「科学」

「記憶」を主題とする小説のなかで最も豊かな作品であるとされる『失われた時を求めて』の著者プルーストが、ドレフュス事件に際して断固として共和派の側に立った (ミケル 1960: 51-2) ことにも見られるように、第三共和制の下で「記憶」について語ることの政治的な意味は明白であった。やがて精神分析学という心の「科学」を生み出すことになるシャルコーのヒステリー研究が登場したのも、このような状況の下でのことであった。彼は女性に特有の奇妙な病とみなされ、生理的な原因を特定できないために仮病の疑いさえかけられていたヒステリーの諸症状を厳密に分析し、それがしばしば男性にも見られる心因性の病であることを明らかにすると共に、催眠術を使って症状を取り除いたり人工的に作り出したりすることができることを実証した。宗教的エクスタシーや悪魔憑きといった現象も、彼によれば科学的に明らかにすることのできる原因を持つ一種のヒステリー症状にすぎないのであり、そこには神秘的なものはなにもない。心について完全に世俗的な「科学」の用語で語ること、これがシャルコーの目指したものであり、彼のサロンや講義は、共和主義者たちが集う「政治的な劇場」であった (Herman 1992: 15)。

このようなシャルコーの流れを汲むジャネとフロイト (および共同研究者のプロイアー) は、いずれもヒステリーの原因を過去のトラウマ (心的外傷) の「記憶」が通常の意識から追放され別の意識過程の内に置かれるという事実求めた。トラウマが取り除かれることなく通常の意識からは隠された領域に蓄積されたままになっていることが様々なヒステリー症状 (身体の麻痺、咳、嗅覚異常など) を生み出していると彼らは考えたのである。ジャネが「解離 (dissociation)」と呼び、フロイトがアザムにならって「二重意識 (double consciousness)」と呼んだこの意識の二重化現象が心の「科学」の基盤とされることによって、フェリーダ症例がその先鞭をつけた心の領域における「魂」から「記憶」への権力の移行は決定的なものになった。また彼らは単にヒステリーの原因を明らかにしただけではない。通常の意識からは追放されてしまっているが故に、患者が「忘れて」しまっているトラウマの「記憶」を治療者が患者との対話のなかで「思い出させ」、患者自身の口から「語らせ」ることが、ヒステリーの治療には決定的な意味を持つと彼らは主張する。まさにその「語る」という「カタルシス」的行為によって、意識の「解離」は解消されヒステリー症状が消滅するからである。このように、「心」は、治療者の介入によって「記憶」をめぐる力関係を変えることができる「場」であるという意味でも、きわめて「政治」的な領域となったのである。

現代のアメリカにおけるトラウマをめぐる論争に一石を投じた『トラウマと回復』の著者ハーマンは、トラウマを対象とする心の「科学」が成立するためには「政治」的運動の支援が不可欠であると主張する (Herman 1992: 9)。彼女の主張を若干敷衍して言えば次のようなことに

なるであろう。トラウマの研究は、専門家としての治療者や科学者のみによって押し進められるものではない。例えばヒステリーの原因がトラウマの「記憶」であることが明らかにされるためには、心の本質が「魂」のような神秘的な実体ではなく様々な外的なできごとの「記憶」の複合体であることが前提されなければならないし、また、ちょうど身体に物理的な衝撃を与えれば何らかの損傷が生じると同じように、ショッキングなできごとを経験すれば、そのような「記憶」の秩序に「意識の二重化」といった乱れが生じうることも前提されなければならない。しかし、もし社会全体が「魂」の実在を疑っておらず、心の病についても科学的な分析によって客観的な原因を特定できるというような心についての世俗的な「語り方」に不信を抱いているとすれば、ヒステリー症状を訴える患者は仮病を使っているとみなされるか、悪魔払いの対象とみなされるかのどちらかであろう。仮に一部の良心的な治療者が患者の声に耳を傾けることがあったとしても、彼は周囲から孤立せざるをえないし、何よりも患者自身が「記憶」という観点からの自らの症状の説明に納得せず、「解離」された「記憶」について語ることの重要性を理解しないであろう。19世紀末にフランスでヒステリー研究が大きく進展し、ヒステリー患者たちが積極的に語りはじめたのは、決してシャルコーの天才によるものではなく、第三共和制と結びついた反教権主義という「政治」運動が世俗主義の拡大に寄与し、そのような研究の前提条件を作り出したからだ。これがハーマンの基本的な考え方である。

同様の「政治」と心の「科学」の関係が、「砲弾ショック」と呼ばれる戦争体験に伴うトラウマの「記憶」に基づく諸障害についても成立するとハーマンは主張する（Herman 1992: 20-28）。普仏戦争を皮切りとして、とりわけ第一次世界大戦以降、戦闘に長期間さらされた兵士の間、運動障害や感情の爆発、悪夢や無感動などのヒステリーときわめてよく似た症状が見られることが指摘されるようになった。そして、ウィーン滞在中にフロイトの分析を受けたこともあるカーディナーのように精神分析的手法によってこのような症状を治療しようとする試みも現われた。しかし、「砲弾ショック」がトラウマを原因とする治療されるべき病として認知される上で最大の障害となったのは、祖国を守る正義の戦いに参加する兵士は勇敢で冷静であるのが当然であり、心的障害にとらわれるような兵士はよっぽど臆病であるかあるいは死を恐れて仮病を使う卑怯者にちがいないという社会的通念であった。調査や治療が長い間部分的なものにとどまり、症状に苦しむ多くの兵士たちが沈黙を強いられたのはこのためであった。ようやく戦争からの帰還者たちが自らのかかえるトラウマに対する組織的な対応を求めることができるようになったのは、ベトナム反戦運動が高まりを見せた1970年代のことであった。戦争は悪であり、戦場で心の傷を負ったことは決して恥ずかしいことではなかったと彼らが声を大にして叫ぶことが出来るようになった時に初めて、彼らの病は病として認知され、1980年にはアメリカ精神医学協会の『精神疾患の分類と診断の手引／第三版（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. 3d ed.）』（以下、DSM-IIIと略記）のなかで「心的外傷後ストレス障害（Posttraumatic Stress Disorder）」（以下、PTSDと略記）という名前を与えられた。反戦運動という「政治」運動が心の「科学」の対象を生み出すのに大きく貢献するというヒステリー研究の場合と同じ状況がここにもあるのだとハーマンは言うのである。

反教権主義や反戦運動といった「政治」運動によって、ヒステリーや「砲弾ショック」の背後に隠されていたトラウマとそれを生み出した外的なできごとの「真実」が明らかになったとする以上のようなハーマンの図式は、きわめて刺激的なものであり、我々に新たな視点を提供

してくれる。しかし、「魂」や「記憶」という領域において、いったい何が「真実」であるのかという問題は、彼女の図式だけでは整理しきれない複雑さと広がりをもっている。現在アメリカを中心とする各国で大きな注目を浴びている女性や子供に対する性的虐待の「記憶」をめぐる論争は、まさにこの「記憶」における「真実」とは何かという問いに集約される。そして、またしても論争の起源は19世紀末までさかのぼることになる。

3. 「誘惑」論の運命

19世紀も終わろうとするころ、ヒステリーの原因となっているトラウマが、具体的にどのような外的なできごとによって生み出されるのかを、患者との対話のなかから見つけ出そうとしていたフロイトにとって驚きであったのは、女性患者たちの多くが、父親から性的な「誘惑」ないし虐待を受けたことがあると証言したことであった。当初フロイトはこのような証言の真実性を疑わず、幼児期に近親者によって現実には引き起こされた性的虐待が彼女たちのヒステリー症状の背後にあるトラウマを生み出したと考えた。しかし彼はその後、この「誘惑」論を撤回し、逆に彼女たちの証言は実際には存在したことのないできごとについての作り話であり、肉親の異性に対する抑圧された欲望が生み出した幻想であるとする「精神分析」論＝「抑圧」論へと立場を転換した。これに対して、1980年代にアメリカで、フロイトによるこの「誘惑」論の撤回は、当時現実に存在していた女の子たちに対する家庭内での性的虐待という事実を覆い隠し、家父長的な家族のあり方を免罪することにつながる裏切り行為であるというフェミニズム的な立場からの批判が登場した（Masson 1984）。ハーマンは、このようなフロイト批判の上に立って、フロイトが「誘惑」論を放棄せざるをえなかったのは、家父長的な家族形態とそれに基づく女性の権利の侵害を告発するような「政治」運動すなわちフェミニズムが当時は十分な力をもっていなかったからだと主張する。そしてこの点では、ブロイアーの患者で典型的なヒステリー症状を示していたアンナ・Oが、フェミニズムの古典として名高いウォルストンクラフトの『女性の権利の擁護』の独訳や、女性・子供に対する性的虐待に反対する運動の組織といった分野で活躍するなかで自らの症状を克服していったことが象徴的な意味をもつとされる（Herman 1992: 13-20）。必然的に家父長の罪を暴くことになる「誘惑」論はそれを支える「政治」運動と結びつかなければならないという彼女お得意の図式がここにも見られるのである。

1980年代のアメリカで、フロイトの「誘惑」論撤回がこのような形で批判されるようになった背景には、1970年代から幼児期の性的虐待を原因とする症状として注目を集めはじめていた「多重人格」が、先にも触れた1980年のDSM-IIIに「多重人格障害（Multiple Personality Disorder）」（以下、MPDと略記）として公式に認知されたという事実がある。アメリカにおける「多重人格」に対する一般的な興味という点では、1957年に出版された二人の精神科医によるMPDと思われる女性の治療記録『イヴの三つの顔（邦訳名、私の中の他人）』（以下、『イヴ』と略記）が有名である。しかし、この本はベストセラーとなり、その映画化も興行的に大きな成功をおさめたとはいえ、MPDの原因の究明とその治療が社会全体で取り組むべき最重要課題の一つであるという認識を生むには至らなかったし、そのような認識に基づく「MPD運動」とでもいうべき「政治」運動と結合することもなかった。そのもっとも大きな理由は、『イヴ』の場合には、「多重人格」の原因としての幼児期の性的虐待が重視されておらず、

従って、そのような過去の事実の「記憶」を回復することによって症状を克服し、家庭内における女性の抑圧という「真実」を暴くことが必要であるとも考えられていなかったということである (Hacking 1995: 40-41)。

これに対して、アメリカ社会全体が1960年代に燃え上がった女性解放運動の洗礼を受けた後の1973年に公にされた『シヴィル』は、同じくMPDの女性の治療記録でありながら、この点でかなり様相を異にするものであった。シヴィルと呼ばれる女性患者の女性主治医ウィルバーは、客観的な診断の為に必要とされる患者と医者との距離を敢えて踏み越えて彼女と親密な友人関係を取り結び、催眠術と催眠剤の助けを借りて、シヴィルの幼児期の性的虐待の「記憶」を徹底的に回復しようとした。その結果としてウィルバーはシヴィルの内に16もの異なった人格を発見し、そのような症状の背後には、幼児期における母親からの恒常的な性的虐待があったとの結論に達した。そしてさらに彼女はこのような結論を実証するために実際に彼女の家を訪ね、虐待の「物証」を見つけ出そうとさえしたのである (Hacking 1995: 41-3)。また、『イヴ』においては純粋な観察の対象に甘んじていた女性患者「イヴ」も、70年代に入ると『私はイヴ』という手記を自ら著し、本名を名のって自分の内部での20以上もの人格の共存と隠された虐待の物語について語りはじめた。そして50年代に自分を診断した男性医者たちの誤診と虐待を告発した。『シヴィル』で虐待者の側に回っているのが、父親ではなく母親である点など、80年代の「MPD運動」での強調点と異なった点もあるが、性的虐待によって生み出されたMPDを克服するために、患者の経験した過酷な事実の「記憶」を呼び戻し、患者と連帯して虐待者たちと戦うという基本図式はすでにこの時点で確立されたのである。

他方、「MPD運動」を19世紀末の「多重人格」論と結びつける上で重要な役割を果たしたのは、1970年に出版されたエレンバーガーの『無意識の発見』であった。彼は、過酷な経験にさらされている「私」から身を引き離そうとする「解離」と呼ばれるメカニズムが「多重人格」を構成する「他我 (alter)」たちを生み出すことを明らかにしたジャンの初期の仕事を高く評価した。そして「誘惑」の事実とそれに伴う「二重意識」によってヒステリー症状を説明しようとしたフロイトとブロイアーは、このようなジャンの仕事を踏襲したにすぎないと主張した。「誘惑」論を捨て、「多重人格」よりもエディプス・コンプレックスを重視するに至ったフロイトは、ジャンによって切り開かれたMPD克服に向けての正しい道筋をねじ曲げたのだというフロイト批判の原型がここにある。MPD運動の中心的組織である「多重人格および解離研究国際学会 (International Society for the Study of Multiple Personality and Dissociation)」(以下、ISSMP & Dと略記)の創始者の一人であるクルフトもこのエレンベルガーの本の大きな影響を受けた (Hacking 1995: 43-5)。

4. 「記憶」信仰の限界

「誘惑」論こそが真理であり、性的虐待の被害者である大部分が女性のMPD患者たちを救うためには、彼女／彼たちの「記憶」を掘り起こし、「誘惑」と虐待の実態を告発していかなければならないとする「MPD運動」は、ハーマンの言う通りフェミニズムの後押しを受けて80年代に最高潮を迎えた。しかしそれと同時に、「記憶」を手掛かりとして「真実」を明らかにするというこの運動の路線が内包する深刻な弱点も表面化してきた。患者たちの「記憶」を無批判に信じることの危険性が、この運動の批判者たちの側からだけでなく、その支持者たち

のなかからも指摘されるようになってきたのである。

1989年のある晴れた日の午後、28才のアイリーンは、居間で遊ぶ子供たちを眺めている時に、突如として20年前に8才の自分が目撃した同い年の少女スーザンの殺害現場の状況の「記憶」を取り戻した。殺人者はアイリーンの父親であり、彼はスーザンを性的に虐待した上に、大きな石でスーザンの頭部を殴打して殺害したのである。通常意識過程から「解離」され20年間も無意識のうちに「抑圧」されていた幼児期の性的虐待の「記憶」のこのドラマティックな回復の物語は、全米で報道され大きな注目を集めた。警察は迷宮入りしていたスーザン殺人事件をこの「記憶」に基づいて再捜査し、アイリーンの父親ジョージは殺人罪で起訴されることになった。「記憶」が一人の男を法廷に送ったのである。

決定的な物証を欠くこの裁判の最大の争点は、まさに長期間にわたって抑圧されていた「記憶」が突如としてよみがえり、しかもその内容が正確であるというようなことがあるのかどうかということであった。検察側は、小児精神医学の専門家であるテアを証人に立てて、この種の「記憶」の回復の客観性を陪審員たちに印象づけようとした。テアは、この事件についての彼女の側からの記録である『解き放たれた記憶（邦訳名、記憶を消す子供たち）』（テア 1995）のなかで、アイリーンの「記憶」の生々しさと詳細さ、父親の犯行直後の9才から14才までの間、彼女が無意識のうちに、ちょうどスーザンが殴打された場所にあたる自分の頭髪をむしる癖があり、その部分はいつもハゲて血が流れていたことなどをあげて、「抑圧」された「記憶」が無意識のうちに持続する可能性を立証しようとしている。そして、現実の裁判では、ホラー作家として有名なスティーブン・キングの作品が示す死や死体へのこだわりも、彼が幼児期に列車事故で友達が死ぬ悲惨な光景を見た「記憶」が無意識のうちになぞっているという点で、アイリーンの頭髪をむしる癖と同じであるといった巧妙なレトリックも功を奏し、陪審員たちは、ジョージに有罪判決を下したのである。しかし、物証ではなく、「記憶」とそれを精神医学的に正当化するテアの証言が決定的な役割を果たして、一人の人間に殺人罪を宣告することになったこの裁判は、逆に家族を崩壊させ（娘による父の告発）、無実であるかもしれない人物を刑務所送りにするほどの力を「記憶」に与えてもよいのかという問題を提起した。

アイリーン裁判で弁護側の証人として出廷した心理学者で「記憶」の専門家であるロフタスは、「記憶」がそれを生み出したできごとその後で与えられる様々な情報の影響を受けやすく、現実が起こったできごとと事後に暗示されたことやマスコミを通じて得た情報を混同しやすいという事実を実験データに基づいて証言したが、トラウマを生むような特殊なできごとについても同じことが成り立つことを充分説得的に展開することができず、その証言は法廷では採用されなかった。しかし、判決に批判的な研究者やジャーナリストによる判決後の事件関係者らへの取材などから明らかになったのは、まさにアイリーンの「記憶」が外部からの暗示によってかなり「汚染」されている可能性が高いという事実であった（Crews & Critics 1995: 168-181）。例えば、アイリーンは、「記憶」を回復した時点では「記憶」の「抑圧」という理論があることをまったく知らなかったというテアの証言とは反対に、アイリーンのかかりつけのセラピストは、彼女が父親による殺人という最も衝撃的な場面を「思い出す」過程で、自分が「抑圧」された「記憶」を回復するように励ますという形で「介入」したと、そしてその際「記憶」内容が真実であるかどうかはとりあえず度外視してよいと助言したことを明らかにしている。またアイリーンが頭髪をむしる癖があったと主張した年代の彼女の写真には、そのような痕跡を見つけ出すことができず、さらに彼女の母親も頭にそのような傷跡があったことを否定

している。もちろんこのような判決への批判者たちは、『ニューヨークレヴューオブブックス』誌上で「記憶回復セラピー (Recovered Memory Therapy)」(以下、RMTと略記)を猛烈に攻撃したクルーズをはじめ、MPDや「抑圧」された「記憶」の存在そのものをほぼ全面的に否定する立場に立っており、彼らの批判を鵜呑みにすることは、逆の意味で危険である。事件それ自体は、法廷の場で、先入観を排し客観的な事実のみに基づいて説明されなければならない。しかし少なくとも「記憶」の取り扱いについては慎重でなければならないことを教えてくれたという点では、彼らの主張にも一定の意義があることを認めざるをえない。

このような単発的な事件以上に「MPD運動」の当事者たちを困惑させたのは、運動の高まりに伴って、MPDの治療に訪れる患者たちのあまりにも多くの部分が、家族から「悪魔儀礼的虐待 (Satanic Ritual Abuse)」(以下、SRAと略記)を受けたと証言しはじめたことである (Hacking 1995: Chap. 8)。MPDの専門家であるガナウェイの1989年の報告によれば、彼のクリニックにやってくる患者のほぼ半分、北米全体ではそれ以上が、幼児期のSRAのみならず青年期にもカルト的儀式の生け贄に捧げる赤ん坊を生まされ続けたといった衝撃的な内容の「記憶」を生き生きと詳細に語った。もし彼女／彼らの証言を全部信じるとすれば、アメリカでは年間5000人もがこの種の儀式的犠牲となって密かに命を奪われていることになる。ガナウェイは言う。また彼の1993年の報告では、あるクリニックで同じくらいの割合の患者が宇宙人に誘拐されたという「記憶」について語ったとのことである。

もちろん、宇宙人はともかくカルト教団による殺人は現に存在するのであるから、SRAに関する証言にはじめから疑いのまなざしを向けるのは誤りである。しかし、唯一公的な機関によって行われた英国における84件のSRA証言についての調査によれば、客観的な証拠によってSRAが裏付けられたケースは皆無であり、多くの場合、子供たちはもっと一般的な形での虐待を受けていたと思われることが明らかになっている。アイリーンとセラピストの関係と同じく、MPDの心理的セラピーにおいては、虐待経験を通常の意識過程から「解離」することによって形成された「他我」をセラピストは対話によって積極的に呼び出し、虐待の「記憶」について語るように励ます。仮にこの対話の過程で、セラピストが虐待についての自分自身の先入見を前面に出せば、患者がこの暗示を受け、事実とはかけ離れた「記憶」について語り出す危険性はきわめて高い。身に覚えのない性的虐待についての子供たちの証言によって、家族の絆を脅かされた親たちを中心に1992年に組織された「虚偽記憶症候群財団 (False Memory Syndrome Foundation)」(以下、FMSFと略記)の主な目的は、まさにこのようなセラピストたちによる「記憶」の「注入」によって引き起こされる被害を防止することであった。

MPD運動の担い手たち自身のなかからも、明らかに非常識な数のSRA証言のすべてを無批判に受け入れることは、かえってMPDや幼児期の性的虐待の長期的影響という病因論一般に対する信頼を損なうことになるという危機感が生まれてきた。クルフトは客観的な裏付けのない「記憶」への狂信的信仰も、「記憶」の回復とそれに基づく性的虐待の告発を現代における魔女狩りとして全面否定するのも一面的であると主張し、1993年にはISSMP&Dの会長も務めたコーンの「記憶」回復肯定派と否定派双方の冷静な対話を求める書簡がFMSFの機関誌に掲載された。またMPDの心理的セラピーにおいて、「他我」たちのそれぞれをあたかも「実存」する人格であるかのように取り扱い、その「自律」を尊重することを前提に「彼女／彼ら」に語らせることは、かえって患者たちをセラピストの期待に応えて「他我」たちとして語るようにしむけ、彼女／彼らの「解離」の固定化につながるという反省も出てきた。そし

て、むしろ逆に「解離」は、ごく普通の人間にも見られる周囲の状況に対するノーマルな対応の延長線上にあるものであり、通常は統合されている「解離」された諸意識過程がMPDにおいては統合を失い、相互に独立した人格であるかのようにふるまっている点が問題なのだということが強調されるようになった。従って、患者が「多重人格」者として「我々」という言葉を使ったり、自分自身を他人のように扱ったりした場合には、セラピストの側はそのような発言に驚いて見せたり、からかったりすることを通じて、患者がMPDに安住することなく「他我」たちを統合する方向に向かうように導いていかなければならないとされる（Hacking 1995: Chap. 6）。1994年のDSM-IVでMPDという病名が消え、同様の症状が「解離性同一性障害（Dissociative Identity Disorder）」（以下、DIDと略記）と呼ばれるようになったのも、DSM-IVのこの部分のとりまとめの責任者であったシュピーゲルが、MPDという呼称には、「他我」たちを実体化するニュアンスがあり、統合の契機を軽視することにつながると考えたからであった。DSM-IIIにおけるMPDの診断基準が個人の内部に二つまたはそれ以上の別々の「人格」が「実存（existence）」するという表現を使っているのに対して、DIDの方では、別々の「人格」ないし「アイデンティティー」の「現われ（presence）」という表現になっているのは、この点で非常に象徴的である（Hacking 1995: Chap. 1）。

もちろんこのような「記憶」信仰の相対化に対しては、患者たちの「記憶」を信じない者は、隠された性的虐待という真理と向き合うのを恐れているだけだというフロイトの「誘惑」論撤回に対するのと同じ批判が寄せられている。世俗主義と結びついていたはずの「記憶」派が逆にここでは背教者を告発する原理主義者に似ており、「記憶」懐疑派の方が世俗主義者に似ているという一種の逆説がここには見られるのである。

5. 過去の「解釈」としての「記憶」

我々が、社会全体の世俗化のなかで、宗教的意識と共にいわば「魂」を失ったことが、過去のできごととそれについての「記憶」が現在の我々にとってきわめて重大な意味を持っているとする「記憶」信仰を生んだ。そしてこの「記憶」信仰を確立する上で決定的な役割を果たしたのが19世紀末に成立した心の「科学」であり、ヒステリーや多重人格の「原因」を過去のできごととその「記憶」にまで「因果論的に」さかのぼって「実証的に」明らかにすることができるとする「知」の形態であった。これが、多重人格をめぐる様々な論争を、前節までで紹介してきたような形であざやかに整理した『魂を書き直す』におけるハッキングの基本的な立場である。彼は「記憶」への狂信に対しては批判的であり、また幼児期における性的虐待が長期的影響を残し、成人期の精神障害の「原因」となるという主張それ自体にも、決して確定した真理ではないとして、懐疑的である（Hacking 1995: Chap. 4）。そして貧困家庭への社会福祉予算が大幅にカットされた1980年代に性的虐待の問題が強調されるようになったことは、精神障害の「原因」としてはより深刻な貧困の問題から人々の目をそらすことになったという見解にも理解を示している。しかし、だからといって彼はFMSFやクルーズのように、過去の「記憶」はまったく信頼に値せず、「MPD運動」は有害でしかないと主張するわけではない。また「魂」を失った人々が「記憶」をよりどころにせざるをえなくなったこの世俗主義的な時代を嘆くわけでもない。

ハッキングの主張はこうである。「記憶」が「真実」のできごとを指し示しているのか、セ

ラピストによって注入されたでっちあげなのかということが真の問題なのではない。我々現代人がなぜかくも過去のできごとにこだわり、その「記憶」について「語る」ことの重要性を当然視しているのかということが問題なのだ。我々が過去について「語る」時、決して我々は過去を忠実に再現しようとしているわけではない。むしろ我々は過去を「記憶」のなかで「書き直し (rewrite)」「記述し直す (redescribe)」ことによって、絶えず我々の人生それ自体を「生き直そう」としているのである。「例えば幼児虐待という呼び名をもつ一連の新たな記述、新たな言葉、そして新たな感じ方によって、過去は記憶のなかで書き直されるのである。」(Hacking 1995: 94)

1970年代になって「幼児虐待 (child abuse)」が急に社会的な問題として注目を集めるようになったのは、必ずしもそのようなケースが事実として急増したことを意味するものではない。むしろ「幼児虐待」という「記述」が定着し、それまでは「幼児虐待」とは見なされていなかった多くの行為が新たな「解釈」を加えられたと考えるべきである。このようにハッキングは言う。例えば、父親が9才の娘の体をシャワーで洗う、あるいは両親の寝室に一緒に寝かせ、もちろん意図的ではないにせよ夫婦の性交の様子を見せるといった行為が新たな「記述」の下では「幼児虐待」として「解釈」されうる。また、自分自身の子供時代にはまだ「幼児虐待」という「記述」が存在しなかった大人が、子供時代の様々な「記憶」をそのような新たな「記述」の下で「再解釈」し、「幼児虐待の犠牲者としての私」という新たな自己理解に到達するという場合もありうる (Hacking 1995: Chap. 17)。後者の過去に受けた行為の「再解釈」については、「誘惑」論の立場をとっていたころのフロイトもエマという女性の例をあげている。彼女は、8才の時にお使いに行った食料品店の店長に性器にさわられるという「誘惑」を受けた。しかし、その行為を彼女が「誘惑」と「解釈」し、それがトラウマとなって買物に行っても店に一人では入れないというヒステリー症状を示すようになったのは、思春期を迎えた13才の彼女がある洋服屋に入った時に男の店員たちの笑い声が聴こえ、その笑いが店長の「誘惑」時の笑いを連想させた時からであった。つまり、思春期を迎え、性の意味を知った時初めて、エマは過去の「記憶」を「再解釈」し「誘惑の被害者としての私」となったのである (Haute 1995)。

この過去の行為の新たな「記述」の下での「再解釈」は、個人によってなされるだけではないことをハッキングは指摘している。例えば、英国議会は第一次世界大戦中に敵前逃亡などの罪で軍法会議にかけられて処刑された兵士たちに、彼らはPTSDの被害者であり、処刑ではなく治療されるべきであったという理由で恩赦を与えた。この裁判の実態が明らかにされたのは1990年であるが、もしこの時点で、先にも触れたように平和運動の高まりを背景としてPTSDという「記述」が定着していなければ、このような形での過去の行為についての「再解釈」とそれに基づく名誉回復は不可能だったはずである。もっとも、このような「記述」の下では、兵士たちは病気の患者であって、自発的意志に基づいて自らの行為を選んだことにはならないので、兵士自身や兵士の遺族たちにとって真の名誉回復にはならないとハッキングは言う (Hacking 1995: 241)。確かに、ベトナム戦争で敵前逃亡したアメリカ兵が反戦運動に参加するなかで、自分の行為の「記憶」を「臆病で卑怯な」行為としてではなく「英雄的な」行為として「書き直す」というような場合でなければ、兵士たちは自分の人生を「生き直し」、新しい人格に生まれ変わったとは言えないであろう。

「記憶」について「語る」ことは、過去のできごとや行為の忠実な再現ではなく、それを新

たな「記述」の下で「解釈」することだという以上のような立場からすれば、「記憶」を「因果論的」にさかのぼっていけば、その「原因」である「真実の」できごとや行為に到達するという「実証主義」も、逆に「記憶」は外部からの暗示を受けやすいから信頼に値しないとする反「記憶」派も、現代において「記憶」が果たしている役割を完全に見誤っているということになる。両者はいずれも「記憶」を実体化し、それが「真理」であるか「虚偽」であるかを「決定」できると思い込んでいる点で、まったく同罪なのである。ハッキングは、「記憶」という観点に立てば、過去は常に「非決定」であると主張する。そのことを彼は、過去のできごとや行為を忠実に再現する隠しカメラが存在したとしても、どのような「記憶」が「正しい」のかを「決定」することはできないという一種の思考実験を使って証明しようとする（Hacking 1995: 247）。

もちろん、このようなカメラが存在すれば、例えばジョージがスーザンを本当に殺したのかどうか、あるいはSRAについての証言が事実かどうかを「決定」することはできる。その意味では過去が完全に「非決定」であると考えるのは誤りである。しかし、カメラが記録することができるのは、出来事や肉体の運動のみであって、「記述の下での行為（actions-under-a-description）」ではないとハッキングは言う。幼い少女が父親にシャワーで身体を洗ってもらっている映像も、性交する夫婦と同じ寝室で眠る少女の映像も、そのような状況についてはどのような「記憶」が「正しい」のかを「決定」してはくれない。少女が思春期を迎えているかどうか、あるいは彼女が大人になってフェミニズム理論を学び、「幼児虐待」という「記述」を受け入れているかどうかによって、彼女の「記憶」は異なったものにならざるをえない。学校の廊下でプロレスの技をかけあっている男の子たちの行為が「いじめ」として「記憶」されることになるのか単なる「遊び」として「記憶」されることになるのか、オフィスで互いの体に触れ合いながら談笑する男女社員がその行為を「セクハラ」として「記憶」することになるのか単なる「コミュニケーション」として「記憶」することになるのかを隠しカメラの映像が「決定」することはできない。あるできごとや肉体の運動が「いじめ」や「セクハラ」として「記憶」されるかどうかは、過去をそのような「記述」の下で「解釈」するかどうかにかかっているのであって、単なる事実の問題ではないからである。

「記憶」について人々がいかに「語る」という問題が反教権主義、平和運動、フェミニズムといった「政治」運動と密接に関係しているというハーマンの主張は、あらゆる「記述」が常に「政治」的であるという点ではまったく正しい。「幼児虐待」、「いじめ」、「セクハラ」などの「記述」の登場は、家族や社会全体における力関係＝「政治」が女性や子供の権利を尊重する方向に変わったことの反映であり、戦線からの離脱や上官の命令への不服従が「英雄的」行為として「記述」されうようになったのは、平和運動を通じて軍隊と軍事行動の正当性が疑問視される方向に「政治」的力関係が変わったことの反映である。しかし、ハーマンは、このような「政治」的力関係の変更によって、これまで抑圧されていた「記憶」が解放され、その背後に隠されていたできごとの「真実」が明らかになったと考えている点で限界がある。「政治」を通じて生み出されたものは、過去のできごとについての新たな「記述」であって、新しい事実の発見ではない。もし「記憶」をめぐる真の争点が、「記憶」を手がかりとして発見される事実の真偽であるならば、「記憶」への狂信か、「記憶」の背後にある事実についての「実証主義」かという二者択一は必至である。「記憶」について我々が熱心に「語る」のは、決してそんなことのためではない。「記憶」について我々がいかに「語る」かは、現在の我々自

身がどのような人生を送ろうとしているかにかかっているのである。我々が「魂」ではなく「記憶」について「語り」、「幼児虐待」や「セクハラ」の「記憶」を重視し、敵前逃亡した兵士を勇者として「記憶」しようとするのは、まさに我々自身が、宗教の助けを借りることなく豊かな世俗的生活を送り、家庭や社会で女性、子供をはじめとする社会的弱者の権利を守り、安易な軍事力の行使に反対するという「生き方」を選び取っているからなのである。

6. 「解釈」と「事実」

すでに紹介したように、FMSFに代表される「記憶」懐疑派が、抑圧された「記憶」の回復を重視する「MPD運動」とRMTを批判する際に最も強調するのは、「記憶」が外部からの暗示や事後的に獲得した情報の影響を受けやすく、事実についての証言としては信頼に値しないということである。そしてそのような証言に基づいて、家庭内での性的虐待や暴力的なSRAが告発されるようなことになれば、家族関係は脅威にさらされ、無実の罪に問われる人も出てくる。もし「幼児虐待」が存在するならば、その告発は客観的な証拠に基づいて行われるべきであり、「記憶」を過大評価するのは危険である。これが彼らの見解である。このような批判は、「記憶」が指し示す事実を無批判に受け入れる「記憶」への狂信に対する批判としては、確かに妥当なものである。しかし、我々が「記憶」について「語る」のは、過去のできごとや事実を「解釈」することによって現在の自分自身の「生き方」を確認するためであって、「記憶」を通じて新たなできごとや事実を発見するためではないというハッキング的な立場から見れば、この種の批判には、「記憶」の重要な構成要素である「解釈」という視点がまったく欠けている。

また、クルーズは、先にも触れた『ニューヨークレビューオブブックス』誌上でのフロイトおよびRMTに対する猛烈な批判のなかで、フロイトによる「誘惑」論撤回についてフェミニズム的な立場とは正反対の観点から批判を加えているが、ここでも「解釈」の問題を軽視し、事実の問題を前面に出す戦略がとられている。彼によれば、フロイトは「誘惑」が家庭内で広範に行われているというおぞましい事実が露見するのを恐れたのではない。逆に「誘惑」が事実としては根拠のないものであり、そのような「誘惑」を前提とした治療ではなんの成果もあげることができなかったということが、症状に改善の見られない失望した患者たちの口を通じて暴露されると、すでに「誘惑」論を多くの症例によって実証された真理であるかのように発表していた自分の信用が傷つくことを恐れたのである。そこで彼は、患者たちが「語る」「記憶」は、彼女／彼らが現実に関与したことではなく、異性の親への性的欲望が作り出すファンタジーであるという事実の上では実証も反駁もしようのない新たな理論をでっちあげたのだ。このようにクルーズは言う(Crews & Critics 1995: 60)。つまり、フロイトは「誘惑」が事実かどうかについての「実証的」な研究を放棄し、患者たちが過去をどう見ているかという「解釈」の領域に逃げ込んだということになるのである。

過去のできごとや行為については、それらが「事実」かどうかのみを問うべきであり、どう「解釈」されるかという問いを持ち込むべきではないという以上のような立場は、一見、堅実に罪のない「実証主義」にすぎないように見える。しかし、ハッキングが指摘しているように、仮に過去を透視する隠しカメラが存在するとしても「記述の下の行為」を記録することは不可能なのであり、「解釈」と完全に切り離された「事実」の領域のみで、「誘惑」や「いじめ」や

「セクハラ」が現実に存在したかどうかを「決定」することはできない。それにもかかわらず、クルーズらが「解釈」に汚染されない「事実」に固執するのは、過去のできごとや行為の「解釈」の多様性という主張それ自体が、彼らにとっては居心地の悪いものだからに他ならない。例えば、異性の子供を愛撫する行為が「誘惑」として、同僚の女性に「君、まだ結婚しないの？」と声をかけたり、カラオケで肩を組んでデュエット曲を歌うことを強制したりする男の行為が「セクハラ」として「解釈」されるのを、おそらく彼らは不当なことだと感じるであろう。なぜならそれらの行為は「常識」的な「記述」の下では、親しい間柄のなかでは当然許容されるべき親愛の情の表現として「解釈」されうるし、行為主体の側の「意図 (intention)」に悪意はないと彼らは考えるからである。仮にこのような行為の対象となった子供や女性が、セラピストに対して自らの「誘惑」や「セクハラ」の「記憶」を「語る」とすれば、それは偏ったフェミニズム「理論」に染まったセラピストが過去の「事実」をそのように「解釈」せよと「暗示」したからだとクルーズなら言うであろう。つまり、「記憶」懐疑派が「事実」と呼んでいるものは、実は「常識」的な「記述」の下での行為者の「意図」通りに「解釈」された行為のことなのである。もちろん、実際に人を殺してもいない父親の行為を「殺人」として「解釈」することは不当であろうし、カルト殺人を妄想に駆られた教祖による罪もない人々の「虐殺」以外のものとして「解釈」することは困難であろう。このような極端な場合には、「常識」的な「記述」を「事実」と見なすことに大きな問題はない。しかし、「記憶」についていかに「語る」べきかということが問題となるのは、まさにそのような「常識」的な「記述」自体の正当性が問いなおされ、「記述」の「書き直し」が求められる境界領域なのである。ちょうど「侵略」と「進出」ということばをめぐって行われたあの論争の場合のように。

7. 「魂」の逆襲

「記憶」を「語る」際に「事実」を重視すべきか「解釈」を重視すべきかという以上のような論争と時期的にも内容的にも完全に並行関係にあるのが文学研究の方法論をめぐる「作品 (work)」派と「テキスト」派ないし「経験」派と「理論」派の論争である。例えば、クルーズはもともとアメリカ文学の研究者であり、彼のフロイトとRMTに対する批判は、「記憶」という場をかりた、「作品」派＝「経験」派の立場からの「テキスト」派＝「理論」派への批判であると言ってよい。彼も参加した、いわば「作品」派＝「経験」派の決起集会とでもいうべき1992年のアラバマ大学でのシンポジウムの報告の内のいくつかから主な論点を紹介してみよう。

まずクルーズ自身 (Crews 1995) であるが、彼は文学についての「語り方」には、「学問的 (disciplinary)」なものとは「自己正当化的 (self-ratifying)」なものがあると主張する。前者が「経験的なもの」を重視し、どこまでがわかっていてどこからがわかっていないのかを、学会のなかでの相互批判を踏まえながら一步一步明らかにしていくというやり方をとるのに対して、後者は「資本主義」とか「ロゴセントリズム」とか「家父長制」とかいった流行の「理論」的用語を文学研究の外部から気まぐれに持ち込み、客観的な証拠に基づいて「真理」を追求するかわりに自分たちの政治的・道徳的立場を文学作品に押しつけようとする点に特徴があると彼は言う。そして、デリダやフーコー、バルトラに依拠するポスト構造主義的な文学「理論」こそが、文学作品を「解釈」者の自己主張を確認するための手段として利用するそのような「語り

方」を生んだのだというのが彼の見解である。クルーズは、文学が「政治的なもの」と無縁ではなく、その点についての「学問的」な研究が必要であることは認める。しかし、彼は、ポスト構造主義者たちの言う「政治」はもともと現実政治には関心がなく高踏的な理論を振り回しているにすぎなかった彼らが、大学のなかで生き残るためにあたかも自分たちがラディカルズであるかのように見せかける必要に迫られて、ポーズとして持ち出したものにすぎないと言って切って捨てる。

また、アブラムス (Abrams 1995) は、文学を作者が世界について何かを語るために創造した統一的な「作品」として受けとめ、そのような「作品」についてのある共有された「経験」を基盤としてきた文学研究の伝統的パラダイムが、文学は外的な指示対象を一切持たず、作者の一貫した「意図」によって貫かれてもいない記号が「織り成す (texture)」「テキスト」＝「エクリチュール」にすぎないとするポスト構造主義的文学「理論」によって脅かされていることを嘆く。そして彼は、人間の意識や目的志向性を一切否定し、すべてを物質の因果法則に還元したフランス唯物論の代表的理論家の一人であるドルバック男爵の描く「理論的世界 (Theory Worlds)」の空虚さを、現実我々が「生活」している「人間的世界 (Human World)」の「経験」に依拠して批判したゲーテとこのような自らの立場を重ね合わせる。これに対してレヴィン (Levin 1995) は、「作品」についての永遠不変の「経験」や「解釈」が存在するとする極端な「右翼」的立場も、無限に多様に「解釈」されうる「テキスト」だけが存在するとする極端な「左翼」的立場も非現実的であるとして、文学研究をめぐる「政治」的両極化を調停しようとしている。

しかしなんといっても、このシンポジウムで最も論争的な姿勢を明確にし、興味深い論点を提出しているのは、言語行為論をめぐるデリダとの論争で有名なサールの報告 (Searle 1995a) である。彼がここで特に強調しているのは、「文の意味 (sentence meaning)」と「話し手の意味 (speaker meaning)」ないし「文」と「発話 (utterance)」の区別である。彼によれば、例えばAがBに窓を閉めてもらおうとして「窓が開いています」と言う場合、この「発話」の意味は明らかに「話し手」であるAの「窓を閉めてほしい」という「意図」であり、Bがこのような「発話」の意味を理解した場合にのみ、当の言語行為は成功したということになる。しかし「文」としての「窓が開いています」は、その「作者」の「意図」とは独立に、「いつでも交渉には応ずる」といった比喩的な意味から、文字通り「窓が開いている」状態の叙述に至るまでの様々な意味を持ちうる。サールがこのような区別を重視するのは、「テキスト」の「解釈」の多様性というデリダ的な議論は、両者を混同し、「文の意味」の多様性から「話し手の意味」の多様性を導出することができると考えている点で誤っていると主張したいからである。大学の教師が試験をやってみて初めて、自分の講義が学生によってまったく想像もできないような仕方で「解釈」されていたのを知って愕然とすることがあるように、「発話」を規定する「話し手の意味」が誤解される場合はしばしばある。しかし、それはあくまで「文の意味」のレベルでの「解釈」の多様性の問題なのであって、「発話」の主体としての教師自身が、「話し手の意味」を見失っているわけではないとサールは言うのである。そしてデリダがいかなる発言や文も、文脈から切り離して「繰返し」たり、「引用し」たりすることができることを「解釈」の多様性の根拠としていることをやり玉にあげて、次のように反論する。私が「まどろみが私の魂を封印する」というワーズワースの詩の一節を犬の名前として使い、「まどろみが私の魂を封印する！」と叫びながら近所を歩き回って犬を家へ呼び戻そうとしたからといって、ワー

ズワースが自らの詩の「話し手の意味」に疑問を抱くわけではないと。

また、デリダがニーチェの遺稿のなかにある「私は私の傘を忘れてしまった」という「文」をとりあげて、ニーチェがこれを書きしめた時にいったい何が言いたかったのか、あるいはそもそも言いたいことなどがあったのかということは、我々には決してわからないと主張しているのに対しては、「話し手の意味」の「認識論 (epistemology)」と「存在論 (ontology)」という区別を持ち出す。すなわち「認識論」的には、「話し手の意味」を確定するのに十分な客観的証拠が欠けている場合は多いが、そのことから「存在論」的にも「話し手の意味」が存在しないとかははっきりしないという結論は導き出せないというわけである。「発話」を生み出す側の主体の内部に「話し手の意味」という名の実体的な「魂」をなんとかしてでも確保しようとするサールの立場は明白である。

「経験」、「人間的世界」、「話し手の意味」など、表現の仕方に違いはあれ、このシンポジウムの報告者たちが一致して守ろうとしているのは、フェミニズム、ポストコロニアリズム、ニューヒストリシズムなどの様々な「理論」を外から勝手に持ち込み、「解釈の多様性」という旗印の下に「作品」としての文学をズタズタに切り裂こうとするポスト構造主義者たちに対抗する統一的な人間「主体」＝「魂」とそのような「魂」たちが共通の地盤の上で交流することのできる共有空間としての文学である。このような彼らの姿勢は、「記憶」について「語る」ことによって過去のできごとや行為を好き勝手に「解釈」することに反対し、「常識」的な「記述」の下での「事実」にあくまで依拠しようとする「記憶」懐疑派のそれとまったく同じものである。彼らが嘆いているのは、まさに「常識＝共通感覚 (common sense)」の喪失なのである。

すでに述べたように、時代や社会や性別や思想的立場の相違を越えた共通の「魂」をすべての人間が共有しているという前提は、社会全体の世俗化によって大きく傷つけられた。クルーズやレヴィンも認めているように、永遠不変の「魂」を取り戻すことはもはや不可能である。従って「魂」の逆襲は「常識」の回復という戦略をとるしかない。すべてを多様な「解釈」のなかに解体しようとする極端な「テキスト」派は、明らかに世俗主義の末裔なのであり、その「作品」派との論争は、ロック以降の「記憶」対「魂」の戦いの一種の代理戦争なのである。アブラムスが唯物論者ドルバックを攻撃の対象とし、ライルの行動主義とダーウィン主義を結びつけることによって人間が「意識」をもつという前提そのものを解体しようとするデネットに対抗して、サールがコンピュータのプログラムに還元できない「心」の独自性を擁護しようとしているのは、決して偶然ではない (Searle 1995b, Dennet & Searle 1995)。

8. 「常識」と「政治」

しかし、「常識」の回復という戦略は、多くの弱点を抱え込んでいる。例えば、サールは「話し手の意味」と「文の意味」が明確に区別できるかのように言うが、「君、まだ結婚しないの？」という「発話」が「セクハラ」として告発される場合に問題となるのは、「僕はそんなつもりで言ったんじゃない」と主張して「話し手の意味」のレベルで「身に覚えのない」非難をかわそうとする男の姿勢そのものなのである。そして、告発された男が「そう言われてみれば、僕の意識のなかには、女は仕事より家庭だという差別意識があったかもしれない」と自らの「話し手の意味」を問い直す場合には、すべての「発話」において少なくとも「話し手」の

意識にとっては明白な「話し手の意味」が前提されるというサールの立論は崩壊する。「どういうつもりで」「発話」しているかは、「話し手」自身にとっても完全に自明のものだとは限らないのであって、「話し手の意味」が「認識論」的にだけでなく、「存在論」的にも確定できないケースはめずらしくないのである。学生に「誤解」されていると考える大学教師の場合にも事情はまったく同じなのであって、「誤解」に満ちた答案を読むうちに「なるほど、そう言われてみれば僕はこんなことも言いたかったのかも知れない」と反省することは大いにありうるのである。詩の一節を犬の名前として使うというような極端な例では、「文の意味」と「話し手の意味」がかけ離れているのは明らかだが、男女関係や大学における講義内容のあるべき姿のようなまさに何が「常識」かということ自体が問われている領域では、「話し手」自身が自らの「発話」した「文の意味」の「解釈」者の一人となり、「僕はいったいどういうつもりでこんなことを言ったのか？」という形で「話し手の意味」を問い直すことが求められているのである。従って、「話し手の意味」の領域が実体的に「存在」することを前提とし、それに依拠して様々な「解釈」に解消されない「常識」を文学研究の内部に回復しようとするサールの試みは挫折せざるをえない。彼が「発話」の意味は常に意識に「現前 (presence)」していると考えている点に焦点をあてたデリダのサール批判 (Searle 1995a: 187) はきわめて妥当なものなのである。

アラバマ大学でのシンポジウムのパネルディスカッション (Eddins 1995) で、大学における文学の研究や教育のあり方が主要な論点の一つになっているのは、この点で非常に示唆的である。文学の「解釈」をめぐる「常識」の回復の必要性が叫ばれる背景には、大学の大衆化に伴って、文学という領域において何をどのように教えるべきかという点についてのエリート主義的な合意と前提がくずれたという背景がある。ハッサンが、アメリカの大学について発言しているように、かつてはアングロサクソン系の上流階層に属する白人男性が多数派であった大学に1960年代以降、女性や様々な人種・民族・階層出身の学生たちが入学するようになり、大学の性格やその社会との関係は大きく変わった。また1980年代にはそうした新しい世代の学生たちが大学の教員層においても大きな割合を占めるようになった。従って、日本で言えば「全共闘世代」にあたるこの「終身雇用権を持つラディカルズ (tenured radicals)」(Roger 1990) にとっては、伝統的に「誰もが読むべき本」という意味での canon となっていた文学「作品」を読書リストから落したり、女性や民族的マイノリティーや被植民者の視点から「読み直す」ことは、あまりにも当然のことであった。「＜作品＞を読まないで、メタレベルの＜理論＞や方法のみを重視する」、「フェミニズム批評、ポストコロニアリズム批評、＜政治＞的正しさ (political correctness) など、＜作品＞にとっては外的な＜政治＞的見解を持ち込む」といった彼らに浴びせかけられる批判は、大衆化する大学の現状に誠実に対応しようとする彼らにとってはむしろ勲章となるものなのである。また逆に「常識」派であるサールが「大学というところはもともとエリート主義的なところなのだ」という開き直りに近い発言をしているのも思想的にはきわめて一貫していると言ってよい。

社会全体の世俗化と大衆化に伴って我々は「魂」と「常識」を失った。代わりに残されたのは、絶えず「政治」的力関係のなかに宙づりにされている過去のできごとや行為についての「記憶」と「テキスト」の「解釈」だけである。子供時代の虐待の「記憶」は、それを家族的価値に敵意を持つフェミニストたちによる外部からの「注入」だと見る保守派と子供や女性の権利への自覚の高まりを象徴するものと見るリベラル派の間の「政治」的対立にさらされており、

『ちびくろサンボ』は、それに対する人種差別主義という批判を「古典」的「作品」へのいわれのない冒涇と見る伝統主義者とポストコロニアリズム的「解釈」として正当化する「テキスト」派との「政治」的対立にさらされている。「魂」を失った代償は確かに大きく、「政治」の風は時には我々に新しい可能性をもたらしてくれるものであるとはいえ、いつも暖かいわけではない。しかし、我々はこのような風に身をまかせながら、自らの人生と世界のできごとについて「語り」つづけるしかないのである。

参考文献

- (1) Abrams, M.H. (1995) 'What Is a Humanistic Criticism?', in *The Emperor Redressed*.
- (2) Chadwick, O. (1975, new ed. 1990) *The Secularization of the European Mind in the 19th Century*, Cambridge University Press.
- (3) コリンズ、ウィルキー(1970)『月長石』創元推理文庫。(Collins, W. (1868) *Moon Stone*.)
- (4) Crews, F. (1995) 'The End of the Poststructuralist Era' in *The Emperor Redressed*.
- (5) Crews, F. and His Critics (1995) *The Memory Wars*, A New York Review Book.
- (6) Dennet, D.C. and Searle, J.R. (1995) 'The Mystery of Consciousness: An Exchange' in *The New York Review of Books* XLII/20.
- (7) Eddins, D. (ed.) (1995) *The Emperor Redressed*, The University of Alabama Press.
- (8) Hacking, I. (1995) *Rewriting the Soul*, Princeton University Press.
- (9) Haute P.V. (1995) 'Fatal Attractions', in *Radical Philosophy* 73.
- (10) Herman, J.L. (1992) *Trauma and Recovery*, Basic Books.
- (11) Levin, R. (1995) 'The Current Polarization of Literary Studies' in *The Emperor Redressed*.
- (12) Masson, J.M. (1984) *The Assault on Truth*, Farrar, Straus and Giroux.
- (13) ミケル、ピエール(1960)『ドレーフュス事件』クセジュ文庫。(Miquel, P.(1959) *L'Affaire Dreyfus*, Que sais-je?)
- (14) プーレ、ジョルジュ(1969)『人間的時間の研究』筑摩書房。(Poulet, G. (1950) *Étude sur le temps humain*, Plon.)
- (15) Roger, K. (1990) *Tenured Radicals*, Harper Collins.
- (16) Searle, J.R. (1995a) 'Literary Theory and Its Discontents', in *The Emperor Redressed*.
- (17) ——— (1995b) 'The Mystery of Consciousness' in *The New York Review of Books* XLII/17, 18.
- (18) テア、レノア(1995)『記憶を消す子供たち』草思社。(Terr, L. (1994) *Unchained Memories*, Basic Books.)